

フランス語を英語で教える際の予備知識について

西川 葉澄

NISHIKAWA Hasumi
Université Sophia
nhasumi@sophia.ac.jp

はじめに

もし英語でフランス語を教えることになったらどうしたらよいのだろうか。やむを得ずこのようなタイプのクラスを担当することになってしまったらどのような準備をしたらよいのだろうか。過去にはあまり聞いたことのない例であるが、今後現実には起こりうる可能性がある。実際、筆者は東京の私立大学において英語でフランス語を教えるクラスを10年間にわたり週6コマ担当していた時期があるが、今年度から数年のブランクの後に、同種のクラスを再び担当することになったため、この問題について考察することにした。フランス語を英語で教える際に前もって知っておいた方がいいこととは何だろうか。

1. 過去に担当した授業について

筆者が過去に担当した例を手短に紹介する。上智大学国際教養学部において非常勤講師として、英語を用いて選択必修科目である第二外国語としてのフランス語を教えた¹。この学部においては全ての授業は英語を共通言語として教えるというルールがあり、学部指定の外国語（フランス語、スペイン語、中国語）の授業も例外ではない。選択する一つの第二外国語を二年間履修することが卒業要件である。レベルは初級、中級、上級の3つがあるが、筆者が担当したクラスは初級と中級である。完全セメスター制であり、例えば初級は学期ごとに Basic French 1, Basic French 2 という具合に分割されている。共通教科書を使用し、同じ進度で学習するプログラムである。フランスで出版された FLE の教科書を使用している。学生はセメスターごとに自由にクラスを移動することができるが、同一の教員が初級を担当した後に持ち上がりで中級のクラスも担当するという仕組みがあったため、初級から中級まで2年間同じ学生を対象に教え続けるということが多かった。また、各セメスターに常にすべてのレベルの授業が学生に用意されるようにプログラムが組まれている。この学部の授業料の支払い方法は、他学部とは異なっており、履修する授業数によって年間の授業料が変動することから、授業に対する対価にシビアな学生が多い。英語で授業がなされるという前提により、授業は国際教養学部の学生のみを対象にしており、他学部の学生の受講は許可されていない。授業は90分の授業が週2回行われるが、2名の教員によるチームティーチングではなく原則として同一の教員が週2回とも

¹ 非常勤講師を始めたころは学部名が比較文化学部であったが、後に国際教養学部という名称になった。

担当することになっていた。

学生は年度によって様々なタイプの学生がいるが、そのほとんどは海外からの帰国生やインターナショナルスクール出身者である。日本の一般の高校卒業者も見られたが、その多くは高校時代に交換留学を体験したなど、少なくとも1年程度の留学経験を持っていた。また時として留学生の履修者も見られた（筆者のクラスにはアメリカ、中国、インドネシア、韓国などからの留学生がいた）。たとえ日本人の名前や見た目であっても、普段使用する言語が英語という学生も多い。つまり、日本語が得意ではない学生が多いということであり、日本語で教えることができないのは学生の不利益にならないようにという配慮からでもある。

この学部の第二外国語を担当する教員は、当時は専任教員が中国語担当の教授1名だけであり、彼女が他言語も含め非常勤講師たちの担当する授業のコーディネートを行っていた。2013年度より、この学部対象の外国語の授業が言語教育研究センターの所属となり、現在では旧習が廃止され統合への取り組みがなされているところである。

2. クラス運営の理想と現実

こうした環境において、どのようなクラス運営をしていったらいいのだろうか。対象言語であるフランス語でフランス語を直接教えるというのが理想ではあるのだが、以下に挙げる様々な厳しい現実から目をそらすことは不可能である。つまり、1年で初級項目を終えるという大学共通のプログラムをこなし、セメスター制であるためフランス語の他のクラスとの共通の進度を常に一定に保ち（始めはスローペースでも、後からじわじわ効果が効いてきて次第に進度がスピードアップするという効果に頼ることができない）、学部のルールである「学生の不利益にならないように英語で重要情報を伝える」という方針を無視することもできない。また、この学部の学生の多くが幼少の頃より英語や日本語を自然な環境で習得してきたというバックグラウンドを理解する必要がある。多くの日本人学生のような「英語学習」をせずに英語が堪能になった学生の多くは、文法的側面について意識的な学習をあまりしたことがないため、大学に入って初めて学ぶ第二外国語が初めてのいわゆる「外国語学習経験」であることが多い。そのため例えばフランス語で直接教えられるという経験は、初めて身に起きる「誰かが何かわからないことを言っているが、自分には何もできない」という大きなプレッシャーとして感じられると、メンタルブロックが発動するきっかけにもなり、学生が難しいとしてフランス語を嫌う、そのためにフランス語を履修する学生数が減少するという、絶対に避けたい負の連鎖のリスクにもつながってしまいかねない。こうした学生に対して、新しい外国語であるフランス語学習に対する心理的敷居を下げ、内容がわかるから面白いと思わせるためのフランス語と英語の使用割合に関して模索した結果、やはり初級のうちはクラスの共通言語である英語を使う割合が多いが、フランス語の使用を段階的に増やし、中級の後半の授業である *Intermediate French 2* からはほぼフランス語だけの授業を目指して、英語使用率とフランス語使用率が逆転するようにシフトしていくという形が理想的であろう。

ところで、上智大学では現在国際教養学部に限らず、他の学部でも英語で授業をするという試みがなされており、大学のFD委員会を主催とする「英語で授業をする」ための勉強会などが活発に開かれている。筆者が参加したのは一回のみであり、その一回で全てを語ることは不可能であるが、その回のトピックは授業が英語だと学生がより受け身になって参加をしないということに対して、「どうやって学生に英語で発話させるか、参加させるか」ということが問われていた。第二外国語のクラスでは、学生の発話は英語ではなく、対象言語でなされる。そ

の発話も、特に初級レベルであれば自分で考えたことを自発的に話すというような高度なものではなく、習ったことが実際に使えるようになるための訓練であり、授業を英語で行うことに関しては、こうした大学の一般的な授業での問題意識と第二外国語の授業における問題意識とは全く違うということが確認できた。英語を使って教える第二外国語の授業においては、英語を話すのは教員だけなのである。つまり、教員の英語による授業運営の質および裁量が問われている。教員の英語での発話が意味不明であれば、授業は大混乱に陥ってしまう可能性が高い。そこで、英語でフランス語を教えるという授業においては、どのような英語がどの程度必要とされるかを以下に整理してみたい。

3. フランス語教師の英語のあり方とは

以下に、英語でフランス語を教える際に、どのようなことに注意すべきなのかという問題について私の個人的見解を述べていきたい。

① 英語による発話は最小限にする

授業で話す英語は必要最小限、かつ簡潔にすべきである。英語を流暢に話せるということを見せる必要はない。フランス語教師にとって力を入れるべきポイントは英語ではなく、最小限の指示で最大限の学習をもたらすことのできる教授テクニックであろう。また多く話せば話すほど、自らの限界が露呈してしまうということも自覚したほうがいい。学生の方が英語が堪能である。概して長い話は混乱の元となるだろう。できるだけ無駄に英語を使わないためにも、初級の早い段階で教室内で使うフランス語表現を学生に教えるのがいいだろう。教員側の発話は指示 (*Écoutez, écrivez, travaillez ensemble avec votre voisin(e)/ en groupe, vérifiez ensemble* 等) や学生を励ます表現 (*Je vous écoute, allez !, parlez plus fort* 等) などは授業では何度も使うことから、特別な意図がない限り英語をあえて使う意味はない。学生がよく使う表現 (*Excusez-moi, j'ai une question, je ne comprends pas, ça s'écrit comment ?* 等) や教員への呼びかけは *Monsieur* や *Madame* だということなどもあらかじめ教えておけば、教員に対して *Professeur* などと呼びかける間違った英語からのトランスファーを訂正する必要がなくなる。また、習ったフランス語表現は徐々にフランス語の比率を増やしていくために、あいさつや数などをはじめとして順次積極的に使用し、学生をフランス語に慣らしていくことは日本語でのフランス語の授業と同じであろう。

② 正確な英語を話す

英語でのメッセージは簡潔で、かつ間違った英語を使わないことが重要である。自分で考えた変な英語は決して使うべきではないだろう。日本に限らず、世界中に非英語話者が独自に考えたおかしな英語表現が溢れているが、同じ轍を踏んではならない。

そのためにも、復習 *review session*、宿題 *assignment*、解答 *answer key* といった教室で使われる平凡な語彙の英語の定訳の把握は不可欠であろう。一見複雑な練習問題のやり方の説明なども、決まった言い方というものが存在するが、それを知らなければ練習問題のやり方の説明にただ時間を浪費するようなことになり本末転倒である。また、怠慢な学生が課題を部分的にのみやって提出したものを返却する時に添える文章はどうするのか、などのよくある場面に対応する紋切り型表現なども時間の節約のために知っている役に立つ²。

² Requirement is not completed.

英語教師でもない我々がそのような表現を知るには、英語圏で作られている英語の教科書や英語圏で作られているフランス語のテキストを参照することが有効である³。

③ 発話のリズムとイントネーションに注意する

どの外国語も同じであるが、英語は特にリズムやイントネーションが不適切だと理解されにくいと言われている。文の区切りは意味の区切りだということも考え、発音の不完全さをカバーするためにも、リズムとイントネーションには気を使うことが重要であろう。内容が学生に伝わらなければ何にもならない。

④ 説明においてはわかりやすさを優先する

最小限でありながら最大の効果をもたらすような説明方法を模索すべきである。語彙も一言の英語で即座に理解されるものならいいが、意味が説明的になるようなものであれば言葉だけに頼らずに画像を提示すると解決することも多い。一昔前なら現物の提示に頼るほかはなかったが、現在では画像を活用することができる。教室内にIT環境が整っているのであれば、新しい語彙はGoogleイメージ検索を活用すれば無駄な説明を省略すると同時に正確な理解をもたらすことが多い。何かを説明する時は明確であるべきで、あやふやな something like that というような言い方はやめるべきだろう。

フランス語と英語の間には使い方が似ている表現も多く、文法や表現等の説明に英語との対比を効果的に使うことで時間の節約ができるが、その場合は英語の対訳だけではなく、必ずフランス語の例文を用いて意味のニュアンスを伝える努力は怠ってはならない。それなしでは学生が英語からのトランスファーに頼った誤用をし続ける危険性がある。特に期間を示す時の前置詞 depuis, il y a, pour 等の使い方の理解において誤解する学生を多く見た。

授業における文法用語の使用に関しては、賛否両論があるが、筆者はなるべく使わないようにしてきた。なぜなら文法の授業ではなく、コミュニケーションを含めた総合的なフランス語力の向上が目的の授業を担当したからである。主語、動詞程度は説明に必要な場合も多いので使用するが、それ以上の文法用語は必ずしも知らなくてもできる事は多いと感じてきた。

また、説明だけに限らないが不用意に英語、フランス語、日本語を混在させると、学生はどこからがフランス語で、どこからが英語なのかということがわかりにくく混乱の原因になる。「えーと」「あっ」「ね？」などの日本語の間投詞的表現を無意識的に挿入することも絶対避けるべきである。こうした日本語は学生にとっては謎の音として機能し、集中力をそぎ、理解を妨げてしまう。

4. 教師としての信憑性を損なわないために

上記にあげたことは全て教師の授業内容に対する信憑性を損なわないための対策である。第二外国語の授業が英語でなされる場合、たとえフランス語に問題がないとしても、教員の英語が間違いだらけで、実際何を言っているのかわからないという最悪の事態があると仮定する。その場合、フランス語を初めて学ぶ学生は、教師のフランス語が信憑性を持つものだという判断ができるだろうか。

³ Cf: *Discovering French, Nouveau!*, MCDUGAL LITTEL, 2006.

この問題は、おそらく教員がフランス語の母語話者及びそれに準ずる者であれば、教師の信憑性にあまり影響がないかもしれない。ところが筆者を含め多くの日本人教員の場合、「日本人のフランス語の先生が英語でフランス語を教える」というややこしい構造により、フランス語圏出身の教員に比べ、教師としての信憑性は低い位置からスタートせざるを得ないと考えて問題ないだろう。何も準備をしなければ明確な負け戦である。

ではどのような準備をして授業に臨めばいいのだろうか。

- ① フランス語のさらなる上達を目指して日々努力する。
- ② 英語を話すなら自信を持つ（大きな声ではきはきと話すなど）、メッセージを伝えるために英語を使うということに意識的になる。
- ③ 英語のリスニング能力向上に力を入れる。
- ④ 授業カレンダー、教室ルールの明示など、強固な外枠作りをする。

といったことが、あげられるだろう。③に関しては、いくら自分の発話を正確かつ簡潔にまとめることを意識するとしても、とりとめのない話し方で展開される学生の質問等を聞くことは不可避だからである。学生の英語が正確ではない可能性もありうるし、英語が話される様々な地域差によりネイティブスピーカーの間でも様々な訛りもあるだろうが、学生からの質問には答えなくてはならない。④に関しては、一見パラドックスのようにも見えるが、授業の進行カレンダーや宿題の締め切り日、成績のつけ方など、あらかじめルールを厳しく設定する方が、学生はいい成績を取るには何をすればいいのかということがわかりやすく、より安心できるという利点がある。外枠の厳しさにより、コミュニケーションの不成立をある程度カバーすることが可能になる。

結論にかえて

日本社会の国際化が進行し、大学にもますます様々なバックグラウンドを持った学生が集まるようになったと同時に、日本においても英語で授業をする大学が増えつつある。しかしその英語も唯一の正しい標準語が存在する一枚岩的なものではなく、むしろそれぞれの訛りを許容しつつ、媒介語として機能する方向へ向かっている。

英語でフランス語を教える際に必要な英語はまさしく媒介語としての英語であり、クラスの学生全員がわかるように簡潔でわかりやすいものでなくてはならないが、コミュニケーションが成立するのであればあえて自分の英語の訛りのために消極的になる必要はないだろう。学生の話す英語も人それぞれであり、彼らのアイデンティティに従う様々な訛りがあるため、時には聞き取りが難しいこともある。英語でフランス語を教えるということは、このような状況に関してフレキシブルに対応できる能力、誰もがわかるようなシンプルな表現に関する知識と明確なコミュニケーションを成立させるスキルを総動員するため、外国語教師のトレーニングとしても役立つだろう。

また上智大学国際教養学部という限られた環境のみでの経験に基づく発表をした結果、参加者の方とのディスカッションを通じて、筆者の職場のような英語話者のための授業の他にも、日本人学生の英語学習強化の一環として全ての授業を英語で行う結果としての英語によるフランス語教室など様々なケースがあるため、英語でフランス語を教えるという現象を対象として、同列に論じることは不可能だということを確認できたのは有意義な成果であった。